

ドン・ジュアンに観るバイロン像(5)

楠 本 哲 夫

‘In Time’s Ocean falling drowned’

Canto II では、^{セビル}Seville での飽食するほどの、女性的世界から ^{ジュアン}Juan は 船出して、荒っぽい男性的世界——^{トリニダダ}Trinidada 丸に乗船、そして難波、それからは ひき続く、無蓋の船での喉の渇きと、果ては〈共喰い〉(仲間を殺してその人肉を喰う) しながら、生死をさまよう航海を続けることになるのである。

この発想において Byron は 自らの数奇な運命を—— Juan が 大洋の嵐に弄ばれるという、そして、survival 残存への我執として——描いているのである。

かくして ドン・ジュアンが 荒涼とした水平線上の 今までとは全く対照的なものによって、悪戯好きの、気まぐれな、神の恣意によって 木の葉船の如く^{さすら}漂泊う世界へと 投げ出されることになる。それは注目に値する特記すべき景観である。

この《Don Juan》の Canto II の嵐の場面の迫真性は 殊の他、その描写において、秀逸であり 圧巻として 讃えられている。聖書よりも もっと もっと Byron の Satanism 悪魔主義を、高く 評価したくなる衝動に駆られながら 膚にむずがゆさを覚えながら 固唾を呑み 一気に読みくだす條りである。

《Childe Harold》の場合の、あの、円滑な、転調 変化がないのを もの足りなく、わびしく思うが——この点は 《Don Juan》が実質的には 全く持たぬとしても、しかし、その構築上の、比喩的表現を通じて、大いに考慮、配慮されている。

これは——〈合理的抑制を超える強い力〉の把握の中で、形をとらぬ、不統一の世界である。《Childe Harold》の Pilgrimage^{巡礼}の場合、計画された輸隔、構想が、《Don Juan》では 唐突な流れ にとって代わっている。

Byron の生涯の諸の出来事、綴られた多くの彼の書翰を照合、さらに、彼の詩い継いだ万巻の詩作品の中から（特に晩年の作品において）、そのプロット、登場人物、偶発的発見を探究するとき、—— ある結論に、到達せざるを得ないのである。

《Don Juan》は Byron の 短かかったが波乱万丈の、劇^{ドラマティック} 的生涯の生々しい記録であり、ジュアンはバイロン自身の描いた自画像であった。Byron is poor! 〈可愛想 なバイロンよ！〉という 主旋律が終始、みずからの手で奏でられ 続けている。

Byron の生涯の出来事——真実、そうせざるを得なかったと思われる——の延々と展がる劇的展界の糸を—— Blake なら、そう呼んだであろう〈悪魔的意味〉で——行きつ戻りつたぐりながら《Don Juan》を読むとき、この作品の中に、その根源を探り、断片のプロセスの究極を見究めざるを得ない。

冒頭の二つの Canto の中では 炎の周辺から中心に向かう、同じような、急ぎ足、小走りの相が^{すがた} 明かにかがわれる。 周辺、つまり、庭園、慨して、^{セビル} Seville の月明の庭から 我々は、亜熱帯の太陽のガラガラと照りつける無風状態の中で 立往生する大型ボートという いわば 燃ゆる火心へと 後

退、後戻りするのである。

その場面設定は ≪Ancient Marinerish≫ 即ち、古代水夫的 であるが Coleridge の詩風には 全くみうけられぬ 茶番劇めいた領域をもちながら展界されてゆくのである。

〈誰かを喰らい、蝕ばもう〉とする脇役の演技でもって、我々は ≪The Deformed Transformed≫*1 の中で 既に述べられた、あの〈不合理なもの、馬鹿げたもの〉の劇場 へと引返してゆく。

- * 1 バイロンの未完成の劇曲。1822年執筆。 かつての英雄たちの姿を示して、悪魔が せむしの Arnold を誘惑した結果、Arnold は Achilles の姿に変えられ、悪魔はせむしとなって 彼に従う。1527年のローマ奪略 における 両人の功を描く第2部までで中断。

〈悶え〉と〈死〉は 〈愛〉の如く、もし 現実が保持されるためには その尊厳が 剝奪されねばならない。 原型的 愛——知——力 の行動の型の 功德によて 我々は Canto II の中で〈利己的愛〉の領域から、 〈非利己的愛〉の領域へと移りゆく。そして そのどちらも 文明化された〈生存〉の基礎、根底を喰い、蝕みゆく、〈絶対的非価値〉なるものである。

Byron にとって 生とは Blake の場合同様—— ‘Life feeds on life’ (生命は生命を食って生きる) のである。そして このことが大いに a matter of eating and being eaten (喰い そして 喰われる) という重大問題 だったのである。

Byron の場合—— Blake の 〈生命は生命を食って生きる〉という——この 〈伝統的英知の是認〉があったので もしこの是認が 除去されるならば—— ≪Don Juan≫ には いささかの英知もなくなり——我々は 単なる

<the mouth and the vulva>*2 (口と子宮) に 惰してしまうのである。

- * 2 Byron が ^{ゾロアスター教}どの程度まで Zoroastrianism に精通していたかは 確認されていない。

ゾロアスター教とは、ゾロアスターがイラン北東部で創唱した宗教。その主神 アフラ・マズダの名をとって <マズダ教>、またその聖大を護持する儀礼の特質によって <拝火教>ともよばれる。

その教義は——世界は相反する根源的二霊 スパンタ・マンユ (聖霊) と アンラ・マンユ (破壊霊) の闘争の中にあり、各人は自由意志によりそのいずれかの霊を撰択して、善と悪、光明と暗黒 の戦いに身を投じるとされる。その教義は強い終末的色彩をもち、ユダヤ教への影響が論じられてきた。

ニーチェ の《ツアラトウストラ》の主人公のツアウストラはゾロアスターのドイツ語読みである。

バイロンの、しかし、次の如き句 (それは R. C. Zaehner の The Teachings of the Magi, Allen & Unwin, 1958, p.43 の中に引用されている) はゾロアスター教に関連があるものと思われる。即ち

‘予は汝を創った……臀部ちかくの一つの口で そして交合こそ汝にとって、口に運ぶ最も美味なる食物の味より さらに美味なるごとく思われる。

また、以下 p.322 を参照。この箇所では、一つのゾロアスター教との関連を証し得ないとしても、しかし、この引用句は—— Coleridge の Kubla Khan ^{クブラ}カーン *3 の文句の中の、‘a psychological curiosity’ (心理学的好奇心) として存在することが許されるだろう。

- * 3 A Vision in a Dream 「忽必烈」 S. T. Coleridge の最もロマン的な詩の一つ。1816年発表。Coleridge が 1797年 (あるいは翌年の秋), Somersetshire と Devonshire との境に近い農家で、Purchas in Pilgrimage 中の、Khan Kubla (元の世祖, 1215-94) が, Xanadu (上都) に造宮した歓楽宮を読みながら假睡におち、夢の中で二、三百行の詩をつくり、目覚めて直ちに筆をとり、この54行の断片をかいたとき、訪客に妨げられて、1時間の後、再び書き続けようとしたが、幻想はついに帰らなかったという因縁つきの詩。

この詩は忽必烈が上都に定めた壮麗な歓楽宮が完成し、アルフ (Alph) の聖なる川が羊腸と流れ、森や峡谷や深淵のある、百花咲き乱れる宮園の光景を描き、それに配するに、月下に鬼人を慕って泣きわびる乙女と、楽器ダルシマーを抱えてうたう Abyssinia (エチオピア) の乙女とをもってしている。

ロマン詩人としての Coleridge の偉大な特質をことごとく兼備した詩で、神韻漂渺たる音楽的魅力と感覚美とに富んだ夢幻詩である。

我々は バイロンが、いかに彼の妻アナベラが<eating>美食しているのを、まのあたり見て、これに反対したかを、知っている。そしてこのことは、彼自身の<肥満の恐怖>と彼の母キャサリンの大食の回想と多小の関係がある一方、アナベラの上あごと下あごが ひっきりなしに ムシャムシャと音立てるのを 聞きながら おそらく 自分を<小びと><一寸法師>と観じとり、そう映った瞬間があったのだろう*4。

* 4 But why will she grow fat? and you too? (だが、何故彼女は肥ってゆくのだろう？ そして君もまた？) とバイロンは 1812. 8. 3 に Mercer Elphistone 嬢に宛てて手紙を書いている。

「あの肥ってゆく腕は——敢て言うが ちょっとばかり乳房もふくらんでゆき——ワルツを踊るときよりも もっとひどい。——しかし、昨日、僕は僕自身、 実際共に食事をとったのだが、このような迷惑侵害に耐えねばならぬ。僕は最近、二流の彼女のチキン肉の、二の腕に、(いやはやあきれてるんだが) すっかり夢中になって、物質的でないものには これっぽちの関心も示すことができぬ淑女に対しては、溜息以外は、とても応待がまずくぶきっちゃになってしまった。

Don Juan は ‘Byron eaten’ (女性から食われる、^{むしば}蝕まれる) 犠牲者となったバイロン自身の描写なのである。

即ち ‘Byron’s eating’ (バイロンの飽食) とは ^{セビル}Seville を出発して Norman Abbey へと、追放された祖国、英国へと帰りたい、帰れない、夢でもいいから帰りたい という切ない願望を Don Juan に託したバイロンの悲願が投影された^{うつた}訴へ、叫びなのである。

^{セビル}Seville は<オレンジと女の花咲く^{さと}郷>である。

‘Seville is famous for Orauges and Women’ そしてドン・ジュアンの奇しき運命、弄ばれた生涯の物語りが ここから始まるのである。

ドン・ジュアンの物語の、これからの流れのすべては <菓子、雑貨類を商う売店>であり、<どんちゃん騒ぎの酒宴>なのである。

オターブ・リーマ詩型を駆使しての Byron の放談、お茶の間閑話形式による人生批評、社会批評なのである。

幼き日の、学童の昔に逆戻りすることによって Billy Bunter 行動型 へと帰り行くことになるのである。Don Juan の物語りは器用にカモフラージュされている。作者バイロンは<しっぺ返し>できるよう いつもバイロンの抜け道を用意している、「だがしかし、読者が正しく読みとれば、その手がかり、端緒はちゃんと与へてある。」バイロン自身、そう述べている。

しかし読者は、騙されはしないのである。即ち 郵便為替はまだ到着してなかったし、致命的の倍償責任は (Bob Cherry から借りたキャッシュで やりくりしていたが) その支払期日は迫っていた*5。

* 5 Greyfrias saga の冒険談を知らぬ読者は George Orwell のエッセイ 'Boys' Weeklies', critical Essays, 1951 の中で、最も良き手引書を見出すだろう。

この詩を通じての ドン・ジュアンの姿勢は、むりやりに食わせられるもの、飽食者、つまり、すらりとした美を愛するバイロンにとって永遠の敵としての姿勢なのである*6。

* 6 「とても、ぶっちょう面をして、そして、その結果 いやというほど盛沢山のディナーを食べた。(僕は、最近、僕の家系の血の、悪徳までも、加えて喰らいつつある)」と 1821. 1. 4-5 の 日記に記している。バイロンの食生活の習慣としての大食、小食は 健康にすぐれているときと、体力の衰えているとき、つまりは、精神面での消長の信ずべき指標と考えてよい。

上述の手紙を、The Levant からの帰路 1811. 6. 25 母宛にかいた 次の手紙と比較するのは興味深い。

「僕が母上に告げねばならないことは長い間、僕は完全に菜食のみをまもってきているので、僕の養生法の中には 肉も魚も一切 摂らぬことにしています。……ワインも全然のみません。」

かつて チャイルド・ハロルドが＜自己認識＞の苦しい巡礼の旅を続けたところを、なんともつかみどころのない ジュアンはオレンジの切片をかじりながら 決して存在もしない、その核心へとせまりゆくのである。これがジュアンの与える——一連の断片のつなぎ合わせ、断続的進展、単なるエピソードの連鎖状態にすぎない——という印象を説明する。

物語は ^{セビル} Seville の街での ^{イネス} Inez — ^{ジュリア} Julia の間の、＜もつれ＞、＜ごたごた＞の中での、あの、＜womb situation＞ 内部的分裂点、子宮の発生状況から始まるのである。ここから裂しく 揺れ動きつつ——難破という ＜力を食いつくす＞ 恐怖を通して あのエーゲ海の島の牧歌的孤独、静寂へと、人間的接触をもつのである。そこでは ^{ハイディー} Haidee と彼女の小間使い ^{ゾウエイ} Zoé と共に 次の分裂へと再び戻り行くのである。

つまり—— 私的^{むしば}酒宴という＜愛を蝕む＞複雑な事態へと再び戻りゆくのであるが——それは不可避免的に、その当時の ^{トルコ} Turk — ^{ギリシャ} Greek の ＜力を食う＞状況という公的複雑な混乱へと巻きこまれてゆく。

そして再び その状態から離れ、解放されるが、またまた、^{ジュアン} Juan は ^{セラリョウ} Seraglio, ^{イズメイル} Ismail の、次の 新しい恐怖へと巻きこまれ、物語りは二転、三転 進みゆくのである！

Juan と Julia, Juan と Haide は love eaters である。しかし Byron はこの詩の図式の中で、＜愛＞は＜英知＞をもつかぎり、必ずや、力（いや無力、無知）の腐敗、墮落から絶縁し、切り離されることができる——ことを 我々に示すべく 大いに意欲的に 関心をもったのである。このことは 声を大にして Byron の 功績が 讃えられねばならぬ。彼が この作品の中で 打建てた＜愛＞という 燦然を光り輝う全字塔として 永遠の真理を秘藏してい

る。

憶い出そう——バイロンは、彼自身の私的図式の中で、この英知を、先ず第一に、the Islamic East（回教を信奉する東洋）において既に探究しており、そして、次に、第二に、あの〈賢明な 女性〉 Annabella への愛の中にそれを、さらに確認し、究めた のである。

バイロンは知っていた。 只単に〈孤独〉 the Island dream 〈島を憧れる夢〉——バイロンの場合、the Island は〈理想〉〈完成〉を意味する——へと引込むことが 彼のような人間、そして又 活力に富み、知性ある人間にとって、いささかの解決の力をもたらすものでは決してない ということ。即ち、そのことは我々人間が、一個の野菜となること、或いは、Blake のいう〈果てしなき闘争〉‘endless strife’ に、つまり突如、暴力に訴えることにすぎぬのである。

バイロンのベニスでの〈愛の耽溺の日々〉はミソロンギでのバイロンの大終局への一つの跳躍板に過ぎなかったのである。

あの、すぎ去りし バイロンの日々、身体的にすら、バイロンが 自らの身体に与えた打撃、損害は、梅毒的自らの浸蝕は、その剣が鞘を使い古したことは 彼の熱病という致命的結果を決定づけた。

〈英知〉 wisdom, the tertium quid がなければ、Swinburne が バイロンの中に神聖化した、あの讃辞 〈Sincerity and strength〉（誠実と力）は すこしも価値をもち得なかったであろう。

そして Byron は勿論 最初から、これを熟知し 悟っていた。〈英知〉は ≪Childe Harold の巡礼記≫の すべて であり、流れゆく主旋律なのである。

1823年のギリシヤ遠征は、壮挙は 結局 自分という綜合体に向って最後の
 さい
 賽を投げたことになったのである。 つまり

‘行動と悩みから解放され、
 心の内奥から解き放たれ、
 外部的強制から解放された’

のである。

一方 ドン・ジュアンのギリシヤへの冒険は、さらに肉官的渦巻の中へと侵入してゆく。 一人の骨と皮になった、頬がやせこけた、青ざめて死人のような、——さもなくば、これまで 経験したことがない程の恐怖にも不思議と無感動なる如き——ジュアンは シクラディーズ⁷ Cyclades*7 の群島の一つの島の海岸に、うち上げられる。

* 7 南エーゲ海のその数約 200からなる群島。

ジュリアとの仲は それで終わったのだろうか？ すべて成算されたのだろうか？ 一見そのように事は運んで行くように見える。 だがしかし——その印章は向日葵^{ひまわり}である——彼女の手紙を想起しよう。

エル ヴ シュイ パルトウー
 “Elle vous suit partout” (cxcviii)*8

—彼女は あなたに どこまでも 従う—

* 8 バイロン自身の印章に この句が刻まれてあったという。

ドン・ジュアンは〈海の抱擁〉から たとえ 逃れえたととしても 〈the Ocean Women〉——大洋の、怒濤の如く襲う女性群——からは絶対に逃れ得なかった。 これは 特記すべき 注目すべきことである。 バイロンは女性

群から逃れることは出来なかったのである。バイロンは女性を征服したのではなく、実は、自らが女性の犠牲者だったことを、かくして、この作品の中で彼自身が アクセントをつけて 強調している。

＜^{ひまわり}向日葵は 私達のほうへ 向くだろうか？

クレマチスは さまよい おりて

私達のほうへ なびくだろうか？

その蔓や ^{つる} 卷髭は 私達をつかみ

私たちに しがみつくだろうか？ ＞

第二 Canto で＜海洋＞が ドン・ジュアンを巻きこみ、その身に入りこんでくるのである。そして第六 Canto の終結まで 重要な主人公としての役を果し、とどまり続けるのである。

Childe Harold (II と IV) 及び Turkish Tales における主要なエレメントは、この物語 及び イタリアの詩の中には そんなに多分には見当たらないし 欠如している。

創造的、^{むさぼ} 貪る如く ^{くら} 喰い続ける ‘永遠の女性’ の象徴としての《ドン・ジュアン》の前半における＜Ocean＞（大洋）の存在は この作品の主要な コーディネイト（調和のとれたもの）として 確立されていることは とても意義深い、重要なことなのである。

^{セビル} Seville の garden ＜庭園＞から murderous innocence of the sea ＜殺人的なるも無垢なる海＞へと飛出してゆくとき、＜eating＞食う というテーマから ＜being eaten＞食われる というテーマへ、＜夢＞から＜恐怖感＞へと 我々は 移行し すすみゆくのである。 厳しい母としての海の果す役割が ‘深海という揺籃の中ゆりかごで揺られて、めざめることなく、安らかな眠りにつく’ ジュ

アンの場合、嵐という子守唄の中で強調されている。——

The high wind made the treble, and as bass
The hoarse harsh waves kept time... (II, xxxiv)

強風が最高音を奏で そしてバスとして
嗚がれた不協和音の波が 拍子をとった

そしてそれに続いて 嵐が
and the succeeding calm which

Lulled them like turtles sleeping on the blue
Of Ocean... (II, lxviii)

寝かしつけた、それらを、 碧き海に
眠りゆく 海亀のように

(つかまれば 食われるべき運命もち)

ジュアンの世話係 Pedrillo は 出血多量で静かに死の眠りにつき そして船
医は、そのしきりに出血する血管から 血をすする。一人の吸血鬼を描く筆致
は、あの、ジュアンが Haidee から母性愛の手厚い看護をうける場面と寄しく
も見事に対比され、描かれてゆくことになる。

難破の後に、遂に、船上のすべての難波者たちは 島に近づくにつれ、

Famine—despair—cold—thirst and heat, had done
Their work on them by turns, and thinned them to

Such things a mother had not known her son

Amidst the skeletons of that gaunt crew.

(II, cii)

飢餓，絶望，寒さ，渇き こもごも襲い
難破者たちは 瘦せ細りゆく 骨と皮に
母親でも見分けえないだろう 我が子を
骸骨の如く やつれ果てた皆の 中から

漂着したその島の岸辺は 岩だらけで，その島に待つ諸の危険の数々は 未知なるも，だがしかし——

Lovely seemed any object that should sweep

Away the vast—salt—dread—eternal Deep.

(II, ciii)

すべてが 快く見えたのだ なんでも
縹渺たる海の潮の恐怖が一掃できるなら

嵐のままに なす術もなく，^{きす}漂泊らい，運を天に委せて，ただ 生きたいがまま，飢餓，渇きを癒やすため，口に食せるものは，渇きをとめるものならなんでも……という その一念，欲望，本能しか 難破者の心には 残在しなかった。船中に生きのこった わずか 四人のものは<共喰い>として，この四人のうちの誰を先ず^{いけにえ}犠として殺して 血祭りにあげるかを 心の中でお互いに探りつづけた。船中にはもう 何も無かった。四人は裸^{はだか} 同然だった。彼奴^{あいつ}の耳を殺^そいで食うか，頭髪をむしりとして，口にするか。目玉をくりぬいて 渇を癒やし，すするか？

吸血鬼よりも もっと もっと 浅ましい心理状態の中で，おたがいに，おたがいを，虚視眈眈とねらっていた…… 我が身ひとり生きのこるために，相

手の足を、手をへし折りもぎとって、喰うか、喰われるか、それは生きのこるために 公然と神の許した、弱肉強食、適者生存の掟であり 自然界に、永遠の太古より繰り展げられて来た鉄則である。許されてよいモラルであり、厳然と存在する神の示唆する掟であることを、鬼気迫る描写で バイロンは、悪魔派バイロンは力強く唄う。

そのような情景の中で ただ生きのこりたい一念の故に 心のはやるままに船内に生きのこった四人は 島に近ずいたとき、その岸辺が見えてきたとき、みずからの生命網^{いのちずな}をみずからの手で 切断した。いや みずからの乗った船をみずからの手で^{てんぶく}転覆させた。

その結果——

泳ぎ上手な ジュアンのみ、結局一人だけ、生きのこるべく岸へたどりついた。

He buoyed his boyish limbs, and strove to ply
With the quick wave (II, cvi)

ジュアンは 若々しい四肢を浮上させ
ゆきつ もどりつ 懸命に
烈しい波にのり岸へ^{たど}辿り着こうとした

そして ジュアンは一つの^{かい}樞^か、即ち That ‘piece of wood of small value’ ここで ノアの箱船^{*9}の役目を果たした、わずかながらも価値ありし一本の木切れの助けを借りて 岸辺に辿り着くことに成功する。

* 9 (聖書) ^{ノア}Noah が大洪水をのがれた箱舟

There, breathless, with his digging nails he clung
Fast to the sand, lest the returning wave,

From whose reluctant roar his life he wrung,
Should suck him back to her insatiate grave:
And there he lay, full length, where he was flung.
Before the entrance of a cliff-worn cave,
With just enough of life to feel its pain,
And deem that it was saved, perhaps, in vain. (II, cviii)

そこでジュアンは 氣息奄奄、呼吸^{いき}もできず
砂浜にしがみついた しかと爪を立て
はねつける咆哮から 生命を絞り出し
返す女波が飽食の墓場へ引きよせぬよう。
それから そこに長々と 横わったが
そこは ジュアンが抛り出された洞窟の前。
痛みを感じるだけの生命力をのこし
助かったもののたぶん無益だと、思われた。

そして、ジュアンは、そこで、洞窟の前で意識不明のまま、昏昏と眠り続ける。

<続 次号へ>

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford: Byron, Hutchison.
- 2) Ernest Hartley Coleridge: The Poetical Works of Lord Byron: Vewis Prints.
- 3) Leslie, A. Marchand: Byron's Poetry, John Murray.
- 4) Francis, M. Doherty: Byron.
- 5) John, D. Jump: Byron, Rontledye and Keygan Paul.